

「原爆」「原爆文学」「私」

李^イ在錫^{ゼンソク}

何事もない日常をあたりまえのことと信じている人間にとつて、「文学」はもちろん「原爆」など、どうでもいい「もの」「こと」になってしまっている。それを非難することはできない。そのような考える人々に何かを強要することも、また、できない。ただ、それが「私」の問題となりうることを自覚させることはできるかもしれない。原爆文学研究会が私に呼びかけるのは、まさにあることの「覚醒」なのだと思う。それは「私」について考えるだけではなく「他者」について考えることでもある。

「原爆」をキーワードとして、韓国国会図書館（国内最多の蔵書を誇る）のデータベースを検索すれば、そのあまりの少なさに驚く。「原爆文学」としての検索は一件もヒットしないのである。せめて、原爆に関する文献で検索できたものだけでも挙げると次のようになる。

まず、〈修士・博士論文〉（2015年以後、著者名などは省略する）としては、18件が存在し、「韓日原爆被害者に対する比較研究」（1999）、「韓国の原爆被害者の福祉対策に関する研究」（1994）、「韓国人原爆被害者に対する社会医学的な考察」（1969）、などのいわゆる「被害者」対策および状況の概括の類と、「北韓（北朝鮮）

核問題と韓国の安保に関する研究」（1996）、「中国の核政策が東北亜地域に及ぼす影響」（1996）、「核拡散に関する研究：第3世界国家を中心として」（1987）、「中国の核開発過程と特性に関する研究」（1984）などの現状を探る研究の類である。

次に、〈単行本〉としては、102件がヒットした。韓国側からの刊行は、「韓日間の未清算課題」（1997）、「捨てられた人々：韓国人原爆被害者たちの手記と反核・平和運動」（1987）、など何冊かを除いては、ほとんどが日本から出版されたものである。「原子雲の下から：詩集」（峠三吉、原爆の詩編纂委員会共編、1952）などから、「爆央と爆心：1945年8月6日ヒロシマで何が起きたか」（武田寛著、2000）に至るものがあり、「朝鮮戦争と原爆投下計画：米極東軍トップ・シークレット資料」（荒敬編、2000）のよくなものも所蔵されている。

最後に、〈国内学術雑誌項目〉では、38件がヒットした。被害者たちの状況と対策などについては「原爆被害老人たち、痛くて泣き、悔しくて泣き：政府、補償・治療に知らん顔をする」（2001）、「在韓原爆被害者の生活と残された補償問題」（1995）、「韓国の原爆被害者実態」（1978）などがあり、全体的に比重が大きい。それから、北韓の核問題を取り上げたもの、朝鮮戦争（通称「6・25」）の時、アメリカが200発の原爆使用を検討したなどというもの、日本の賠償責任を問うもの、政治と国際関係、差別との関係から論じたものがある。

原爆に対して（実際、朝鮮が被植民地状態から脱出するにあたって、その一要因として考えることも可能であると同時に、同じく被爆した在日朝鮮人もかなり存在することから）複雑な感情を抱えている韓

国で文学（あるいは歴史、社会、文化）の場でそれを凝視したものはないのでろうか。図書館検索に頼っただけなのでこれで何かを言い切ることはできないのだが、それでも期待するよりはるか少ないだろうことは推定できる。90年代に出版されて、ベストセラーにもなった原爆に関する小説を見ても、多くの人を同時に高揚させ、集団幻想を起こさせるような「読み物」は、大概つまらないものだという思いを拭いきれない（退屈している人間にとつてそれは魅力的に見えたりする）。原爆の問題が、その根底に政治的な色彩を濃く帯びているのなら、それは文学のもつ可能性、すなわち、抑圧を暴露する機能によつて批判し、凝視すべき対象なのである。事実の確認も大切であるには違いないのだが、それ以上に隠蔽されている原爆の政治的な構造を眼にみえる事実（それさえなかなか見えてこない場合も多いが）以上のものとして、議論の場まで導き出すことが問題の核心へとより近づいていくことにつながるだろう。

SF映画などに何気なく登場する核武器の使用——ときには、人類を救える強力な手段として登場する——について考えながら、事実としての「原爆」ではなく、物語へと移行してしまった一面を発見することはそんなに難しいことではない。さまざま概念や事件が、元の姿から離れ、新しい形象を形づくりながら進行することは観察可能なことである。大切なのは、それがいかに受け入れられているかを観ること、大抵は巧妙な隠蔽装置を働かせているそれにかなる問題が含まれているのかを観ることである。それが現在のスタンスと未来的な視野を持つことにつながるかもしれない。確定性のない未来に関わる予想、期待、あるいは

は不安などの喚起。そのような意味で「原爆文学」は未来へ向けずて発せられた言葉だとも言えよう。

原爆に対する人々の認識は、苦痛としての過去の傷痕、漠然とした現在の不安、破滅と *entertainment* という分裂した展望としての未来的な仮想世界がそれぞれ並存しているようである。「原爆」は「暴力への願望」、「権力争闘」の場で欲望の対象になる性質をもつていて、将来も、欲望の対象になり続けるかもしれないという不安がすでに在る。欲望は囚われやすいものであり、それが露骨になることも頻繁にある。それを抑制しうるものを我々は「理性」と呼んでいる。文学は、何をすべきか、何ができるのか問われている。

韓国において、「原爆」の問題が文学として成立していないのは、いうまでもなく、「体験」の不在（当時、在日中被爆した人々を除いてだが、彼・彼女らに対し一部の人以外には特に関心を持たなかった）から起因しているようである。日本も韓国の植民地下の文学をあまり理解していない（または、関心の対象としていない）のと同様に……。しかし、（旧ソ連のチェルノブイリなどは挙げられるかも知れないが）「原爆」を「文学」として成立させる土壌が日本以外では存在し難いのも確かである。「原爆文学」を考えることは、それ自体にとどまらず、広く相対的な姿勢を必要とすることであり、「私」の問題だけではなく、「他者」の問題までをも考えうる視線なのだと思いたい。「私」から「私たち」へ問題を拡張させることこそ、「原爆文学」の、または、その研究の未来像ではなからうか。問題を個人化または狭小化してしまうのでは、結局、何も問題化していないのと変わらないのである。

最後に、個人的に一つだけ反省しなければならないことがある。それはいわゆる「風聞」だけにたよった側面、すなわち、直接資料に当たっていないことである。何かを問題とするためには、こちらから資料に働きかける必要がある。研究会において、時には恥かしく思ったり、感動したりするのだが、それは知らなかったことを知らされることの刺激（自らの無知を自覚）と、問題提起に

対する刺激によるものである。いつか、刺激を与えうる機会をもつことを望んでやまない。「私」の苦痛だけではなく「他人」のそれをも問題化するのが「原爆文学」なのであり、その問題を「私」が引き受けることによってしか「原爆文学研究」は始まらないのだから。